

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

# とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ

Shiina Howahowa

5

### レイジ

「スルーカラー」の  
タンカー役で、  
落ち着いた性格の  
青年。

### ロナ

「スルーカラー」に  
所属する、  
口リ巨乳・僕っ子の  
女性格闘家。

### ノーラ

「スルーカラー」  
メンバーである  
短剣使いの勝気な  
女性。

### エリザヴェート

「スルーカラー」  
所属の金髪縦ロール  
系魔法少女。

### カザミネ

侍になりたい男性剣士。  
「スルーカラー」で  
アタッカーを務める。

### ミリー

口調がのんびりした  
「スルーカラー」の  
女性魔法使い。

### ツヴァイ

ギルド「スルーカラー」  
のリーダーを務める  
両手剣戦士。

### ピカーシャ

「妖精の国」の  
マスコットの存在ながら、  
アースに懐いて旅に  
同行する青い鳥型妖精。

### 砂龍

「龍の国」で  
崇められている  
双龍が一人。  
物静かな外見に  
よらぬ凄腕の武人。

### ゴロウ

「龍の国」の若者。  
一度は挫けた  
龍になるという目標  
に再び挑戦中。

### アース

本編の主人公。マイペースな  
プレイですっかり有名人に。  
リアルでは38歳独身の  
会社員、田中大地。

### 雨龍

「龍の国」で  
崇められている  
双龍が一人。  
妖しいほどの美女  
にして凄腕の武人。

## プロローグ

「この辺まで来たら、そろそろいいかな」

ここはVRMMO「ワンモア・フリーライフ・オンライン」の中にある「龍の国」。

その「龍の国」の三番目の街、三が武たけを出てしばらく歩き、人の目が少なくなつたところで、アースこと自分はあるえて同行者にも聞こえるように呟いた。確認しておきたいことがあつたからだ。

「アースよ、何がよいのかえ？」

首をかしげる同行者——「双龍の試練」を通じて知り合つた龍の兩龍りゅうりゅうさんに、質問をぶつけてみる。

「三が武を出るときに貴女あなたが仰おつしやつた『旅にはついていくが自分は戦わない』という言葉の意味を考へていました」

兩龍さんが「ほう？」と声を上げるので、話を続ける。

「結論から言うと、『戦わない』のではなく、『戦えない』なのではないかと」

そう言うと、兩龍さんは驚いた表情を僅かに浮かべた。

「どうしてそう思うのじゃ？」

この切り返しは予想できていたので、そんな考えに至った理由を告げる。

「実は少々、ドラゴンと妖精の両方に知り合いがいますね。彼らから、『ドラゴンは力の制御を諦めて他種族との関わりを極力減らし、龍族は力の制御に成功した』という話を聞いたことがあるのです」

明らかに、雨龍さんの表情に焦りが浮かんできた。が、無視して続ける。

「そういう情報があれば色々想像ができます。今回の件に一番繋がりやすいのは、龍族がなぜ力を制御するのか、ですね」

ここで一旦話を区切り、雨龍さんをチラッと見る。

「答えは、無用な破壊、殺戮などをしないため……でしょう」

力に溺れやすい人間も見習わなきゃいけないな、と内心で考えてしまう。

「雨龍さんは言うまでもなく『龍』です。今の姿はあくまで人型に変身しているにすぎない。そんな方も、本来の力を振るって戦闘をしてしまったら……」

そこまで仮説を積み上げると、雨龍さんは「降参じゃ」と言ってきた。

「アース、お主の予想は当たっておる。我々龍族とドラゴン族は、特に物理的な力に優れておった……優れ過ぎておった、と言うほうが正しいのう。我がが挨拶のつもりで軽く触れるだけでも、他種族にとってはそれが致命傷となってしまう」

やっぱりか、と、自分は呟く。

「頂いたこの指輪は、召喚、送還の力は恐らく大したことはないでしょう。一番肝心なのは、貴女の力を振るっても周りが大きく破壊されないようにする結果能力なのではないかと」

ゲームで強力な魔法を使用したときにどんなに凄まじいエフェクトがあっても、戦いが終われば世界が元に戻っているのと同じ感じなのだろう。

「そこまで読まれておるか……」

雨龍さんはもはや呆れ顔だ。

「ただのサボりとは思えなかったから、貴女の言動を疑った。それだけですよ」

「わらわもまだまだ甘いのかのう？」などと言いなから雨龍さんが手を顔に当ててる。ま、事情が分かればそれでいい。関所が見えてきたので、このお話はそれまでとなった。

## —— ツヴァイSIDE ——

「いよいよ六が武に到着だな！」

俺ことツヴァイがギルマスを務める『ブルーカラー』も、ようやく中堅ギルドとして名が売れてきた。ま、大型のギルドにするつもりはないけどな！　あまり大人数になってしまうと、今のよう

な和気藹々とした空気を保つのは難しいのだ。

「ツヴァイ、アンタはまた調子に乗りすぎないでよ〜？」

ノーラは相変わらず厳しいぜ……最近では、騒いでいると容赦なくハリセンが飛んできやがる。ダメージはゼロだが、精神的に痛みを感じるんだよな、アレ。アースの奴、本当にノーラに渡してくれちゃって。ドツキ役は俺がやりたいってのに。

「まあまあ、ノーラさん」

カザミネがノーラを押さえてくれる。こいつも大太刀おうちを手に入れてから、強くなるスピードがマジで上がった。前から「刀系の武器が欲しいんですね」といつも言っていたが、大太刀を手に入れた途端に廃人レベルと言っているぐらいに没頭しやがって……今ではギルドナンバー1の物理アタッカーになっている。

「だがツヴァイが盛り上がる気持ちも分かる。ようやく最後の街だから、気合も入るよな」

「うんうん、そーだねー」

俺をフォローしてくれたのは、レイジとその彼女のコーンポタージュ。アタッカーがカザミネなら、タンカーはコイツだ、ってぐらい活躍しているのがレイジだ。魔法使いのコーンポタージュは他のギルドに居たんだが、そのギルドが解散してしまったらしく、レイジを頼って『ブルーカラー』に入った。しかし、リア充を地で行く二人は、毎日周りにハートマークを振りまいていて……仲間だから、「爆発しろ」とはさすがに思っていないが……

「さあ、さっさと街に入っちゃいましょう、ね、ツヴァイ……」

「そだね〜、ほら、いこうか〜」

油断していたら、エリザとミリーが俺の左右から腕組みしてきて、がっしりホールドしやがった！ 何だか最近、この二人がやたらとくっついてくるんだよなあ。

「二人とも離れてくれよ！ この格好で六が武に入るのは恥ずかしいぞ!？」

こう言った途端、エリザが泣きそうになる。

「ツヴァイ……私の体では不満ですか……？」

ミリーはいつものように、ぼえぼえ〜っ、とじていやがる。

「いいじゃない〜、両手に花、しあわせでしょ〜」

だからやめてくれっての！ 最近は掲示板で、エロゲ主人公とか言われ出してる始末だつてのに！ 他の女性メンバーも含めて五人同時にくっつかれてるところを見られた日は、マジで針のむしろ状態で、すぐにウィンドウを閉じたぐらいだ。

助けを求めて必死で横を見るが、ノーラは呆れ顔だし、カザミネは笑ってるし、レイジとコーンポタージュの二人は微笑ましそうにこちらを見ているだけだし、マジで助けがねえ！

「ツヴァイ〜」

「ツヴァイく〜ん!」

「ツヴァイちゃ〜ん」

んげ!? 噂をすれば、ミザ、ミザリー、ミザーナの三姉妹まで!

「おい、エリザ、ミリー、マジで離してくれ! あの三人から逃げたい!」

「却下」

「おおお〜い!!」

結局この後、五人に周りをつちりと固められつつ、六が武に入ることに……  
掲示板のしつとスレが更に延びそうだぜ……

——グラッドSIDE——

【そうか、例のレイドの一八人は、一回目の挑戦を失敗したか】

【間違いないねえ。ここまでは、タンカーを立ててアタッカーと魔法で削るというオーソドックス戦法をとって、数の暴力で押ししてきた連中だ。崩れればむしろ脆いのだろうな】

【そうか、じゃあこちらにも、もう少しスキル上げをする時間の余裕があるな?】

【ああ、あると思うぜグラッド。がんばれよ】

【期待に応えられるように努力するさ……情報、感謝する】

【気にするな、じゃあ切るぜ】

ウイスパークが切れ、情報屋の声も聞こえなくなる。

この世界で強くなろうとつつ走りすぎた結果、俺は一度パーティから追放され、トーナメントイベントではフェアリークインに敗北し、屈辱にまみれた。そんな俺も心を入れ替えて新しいPTを結成し、PVP大会を通して元リーダーのシルバーに挑んだが……そこでも接戦の末、敗れることになった。

だが三度大きなチャンスは巡ってきた。

「グラッド、どうだったんだい? 例の一八人は?」

「失敗したようだ。俺達にも、一番乗りのチャンスは十分に残っている」

「そうか、それはいい情報だ」

「さすが情報屋、耳が早いですね」

新しい五人の仲間と共に話し合い、「龍の儀式」攻略のためにお互いの知恵を絞る。

今度こそ俺が……ではなく俺達が、大きなことを成し遂げるのだ。シルバーのじじいを見返す、なんてちんけな目的のためではなく、このでかいクエストを一番乗りで達成する喜びを仲間と一緒に分かち合うために。

**9：伝言者**

なんだよ、料理店の人が

**10：伝言者**

そうよ、お互い同じことを感じてと思う

**11：伝言者**

それはつまり、どんなの？

**12：伝言者**

そうだな、一番言いたいのは「人の話をきちんと聞け」ってことかな

**13：伝言者**

そうそう、それになんというか、金を出すからさっさと物よこせ、  
って態度よね

**14：伝言者**

わたしは妖精国の南に住んでるけど、そういう人ってやっぱりいるねー

**15：伝言者**

何度「テメエに売るのはねえ！」と言いたくなかったか  
商売だから我慢してるけどよ……

**16：伝言者**

商売も大変かもしれないが、最初は訓練場のほうも大変だったぞ

**17：伝言者**

もしかしてあなた教官？ それってどんな風に？

**【世界の伝言板】**

これは「こちら」の世界の人のみが閲覧できる掲示板です。  
「あちら」の人達に対する不満などをお互い書いてみましょう。

**1：伝言者**

なにこれ？

**2：伝言者**

「あちら」の人って……数ヶ月前から現れ出した人族の冒険者のこと？

**3：伝言者**

多分そうじゃない？

**4：伝言者**

それだったら不満はいっぱいあるわよ

**5：伝言者**

同感だな……商売だから面と向かっては言わないが、文句は山ほどあるぜ

**6：伝言者**

おに一さん、どこの人？

**7：伝言者**

ファストっていう街だが、  
その「あちら」の人達が最初に転移してくる街といえいいか？  
そこで食材店をやってる

**8：伝言者**

あ、あの人か、私はお隣さんよ

**27：伝言者**

ええと、私はファストで「あちら」の人族にクエストを割り振っていた者ですが……

**28：伝言者**

苦労人が来てしまったぞ……

**29：伝言者**

やつれてたよね……体、大丈夫？

**30：伝言者**

ええ、何とか持ち直しました

**31：伝言者**

クエストをあの人達に割り振るのは、本当に大変だよね

**32：伝言者**

そんな報告を受けて、妖精国では宿屋が一括管理する方法にした、という実情があったりします

**33：伝言者**

こちらはそういうわけにもいかないですよ  
こちらの世界を理解してもらうために丁寧にやらないと……

**34：伝言者**

だけど、ろくすっぽ話を聞かないよね、あの人達

**35：伝言者**

ひどい人になると、前ふりはいいからさっさと始めろ、と面と向かって言われましたよ。あのときは本気で殴りたかったです

**18：伝言者**

やり方をきちんと指導しようとしてたんだが……  
「俺のやり方がある」とか言って耳を貸さない奴が多かったな  
そのくせ武器の扱い方が間違っているから、身につくのが遅い

**19：伝言者**

馬鹿だよー、専門の人の指導を受けたほうがよっぽど早いのに

**20：伝言者**

まあたまに、ちゃんと礼儀を持って接する見所がある奴もいたがな……  
本当にたまに、だが

**21：伝言者**

そういう人にはつい、ちょっといいおまけとかしちゃうね

**22：伝言者**

他の無愛想な連中から少しずつ巻き上げてればいいからな

**23：伝言者**

そうとも知らず……ばっかだよーえ

**24：伝言者**

まあ、ほどほどにな……

**25：伝言者**

大丈夫だ、あからさまにやってるわけじゃない

**26：伝言者**

そういえば、念入りに弓の練習をしていたあいつは頑張ってるだろうか



**371：伝言者**

ふう、まあ大体の不満は出たかな

**372：伝言者**

でもあいつらは直さねーだろ、期待もしてない

**373：伝言者**

だね、はっきり言って一部のいい人達にだけ、  
いいサービスをしていればいいんじゃない？

**374：伝言者**

そうだな、これは「差別」じゃなくて「区別」だ

**375：伝言者**

じゃあ今後、あちらの世界の人達に対してはそんな感じで？

**376：伝言者**

いいかと

**377：伝言者**

それでいこう

**378：伝言者**

異議な〜し

**379：伝言者**

じゃあ、具体的にいいサービスって何？ ってことになるんだが

**36：伝言者**

それは……

**37：伝言者**

よく我慢したな……

**38：伝言者**

ひどい……

**39：伝言者**

お陰で精神的に疲れましたね……

**40：伝言者**

ファストは本当に地獄だったんだな

**41：伝言者**

ええ、ファストは辛かったです

**42：伝言者**

商売だから、仕事だから、って割り切るしかなかったよね

**43：伝言者**

全くですよ……

**44：伝言者**

だからこそたまにいるいい奴に出会うと反動がな……

---

**390：伝言者**

あの人ねw

**391：伝言者**

実に簡潔w

**392：伝言者**

妖精達が一斉に反応するでしょw

**393：伝言者**

ガタッ

**394：伝言者**

ガタッ

**395：伝言者**

ガタタッ

**396：伝言者**

ガラガラガッシャン

**397：伝言者**

落ち着け妖精軍団w

**398：伝言者**

>> 396 は特に落ち着けw フェアリークィーンじゃあるまいに

**399：伝言者**

……

**380：伝言者**

そうだね、ひいきがばれると色々面倒なことになる未熟な人が、あちらには多いし

**381：伝言者**

さりげなく、ばれないように、が前提だよな

**382：伝言者**

5%ぐらい代金安くするとか、多少量を増やす程度？

**383：伝言者**

まずはその辺で様子見だな

**384：伝言者**

だね、ひいきで孤立させちゃったら申し訳ないし

**385：伝言者**

じゃあ、それでいってみましょう

**386：伝言者**

むしろ、いい意味で気になるあっちの世界の人っている？

**387：伝言者**

名前を出さないとダメ？

**388：伝言者**

逆、出しちゃダメ。大体の外見でいい

**389：伝言者**

弓

**410：伝言者**

あの人か、あの人可愛いよ

**411：伝言者**

最近女性に困まれてる両手剣使い君かな～

**412：伝言者**

爆発しろ

**413：伝言者**

爆発しなさい

**414：伝言者**

あんな風に引っ付いてくれる彼女が欲しい

**415：伝言者**

いいよなー……アレ……

**416：伝言者**

自分からいかなきゃ見つからないと思うよ？

**417：伝言者**

仕事が忙しくてそんな時間は……

**418：伝言者**

人によっては、夜中までお店開けてないといけないもんねえ

**419：伝言者**

そうなんだよ、変な時間に客が来ることが多いてさ……

**400：伝言者**

当たりかよ！ 本人かよ！

**401：伝言者**

フラれたって噂が

**402：伝言者**

マジ!?

**403：伝言者**

それ以上言ったら

**404：伝言者**

やべえ、この話は終わったほうがいい

**405：伝言者**

なんとも情けないのう

**406：伝言者**

ピキッ

**407：伝言者**

擬音をわざわざ書かなくても  
あと、405も煽るな

**408：伝言者**

ほ、他にいないか？

**409：伝言者**

炎の槍使いの女性

**797：伝言者**

だから区別もつけたくなるよ……

**798：伝言者**

それは仕方ない

**799：伝言者**

参考までに、区別はどうやってます？

**800：伝言者**

いい人には、次の街でいい宿屋に泊まれるように手配してるさね

**801：伝言者**

そういう手段もあったか

**802：伝言者**

街がいくつも続く龍の国ならではだな

**803：伝言者**

あちらの人族は、龍の国に行ってる人、今多いもんねえ

**804：伝言者**

お陰で忙しいったらありゃしない

**805：伝言者**

妖精国は今はゆったりと過ごしてます

**806：伝言者**

次はエルフ達だって話だけど

-----  
**788：伝言者**

結局ドコもそれなりにきついでことか

**789：伝言者**

楽な仕事なんてないって

**790：伝言者**

宿屋が一番きついと思う

**791：伝言者**

龍の国の宿屋は、もろにあちらの人を区別してるって話だが

**792：伝言者**

あたしゃ、宿屋をやってる女将だけど

**793：伝言者**

え!?

**794：伝言者**

本当ですか？

**795：伝言者**

まあいい人1割、マシなの4割、ろくでもないの5割かね

**796：伝言者**

それはまた……

**817：伝言者**

さすがに触られることはないと思うけど……

**818：伝言者**

私、触られかかった……ついビンタしちゃったわよ  
そうしたら「私どもにはご褒美です！」とか叫び出すし

**819：伝言者**

ナニソレ怖い!?

**820：伝言者**

仲間のダークエルフ達が脅えちゃってる……

**821：伝言者**

見られるのは我慢するにしても、触られそうになったら反撃するべきよ

**822：伝言者**

そうね、そういうやらしい行為から身を守るための攻撃なら、  
問題はないみたいだし

**823：伝言者**

ダークエルフさんなら、矢で股間や心臓をザクッとやっても、  
いいんじゃないかしら？

**824：伝言者**

そ、そうね、みんなにもそういつて励ますわ！ ありがと！

**825：伝言者**

スタイルがいいってのも困るわね

**807：伝言者**

そのエルフの森にいる一人ですが……ここを見ているだけで疲れますね

**808：伝言者**

予行演習だと思いなさい

**809：伝言者**

ファストの人達はそれすらなかったんだしねー

**810：伝言者**

そうですね……確かに

**811：伝言者**

私はダークエルフなんだけど……ちょっと女の人に質問

**812：伝言者**

なに？

**813：伝言者**

なんでしょう？

**814：伝言者**

先に答えとくわ、おっぱい大きかったら見られまくるわよ

**815：伝言者**

おっぱ……えええええ！ やっぱいい!?

**816：伝言者**

遠慮ないわよ……

**956：伝言者**

仕方ないわよ、切り替えましょう

**957：伝言者**

ここで色々言えた分、気は軽くなったな

**958：伝言者**

それは言えていますね

**959：伝言者**

というか、もっと早くこういうのを設置してほしかったよな

**960：伝言者**

まあまあ、これからも多分使えるんですから

**961：伝言者**

要注意なあちらの人の情報はここで提供してね

**962：伝言者**

さて、仕事に戻りますか

**963：伝言者**

またコロシウムであちらの戦士を返り討ちにする仕事が始まる

**964：伝言者**

え、もしかしてネクシアのコロシウムのチャンプって貴方!?

**965：伝言者**

そうだぞ、まだまだあいつらには負けん

**826：伝言者**

ダークエルフの皆さんは胸がね……

**827：伝言者**

くやしくなんかないもん

**828：伝言者**

ゴメン……

**829：伝言者**

一部の人にとっては問題ね

**830：伝言者**

こればかりは個人差が

**831：伝言者**

持つ者のよゆうかあー!?

**832：伝言者**

いけない、変なスイッチ押しちゃったかも

-----  
**954：伝言者**

そろそろ夜明けが近いわね

**955：伝言者**

あーまた商売か、もっと休みたいんだがなあ

**976：伝言者**

だけど、掲示板って 1000 までらしいよ

**977：伝言者**

こっちも終わりか

**978：伝言者**

管理者にお願いできない？

**979：伝言者**

もうやってる

**980：伝言者**

返答きた

「延長はダメ」だって

**981：伝言者**

次の長い夜までお預けか

**982：伝言者**

仕方ない

**983：伝言者**

ここに残り続けて話をしていたら、残れない人の恨み買うかも

**984：伝言者**

そうかもね

**985：伝言者**

それは避けたい

**966：伝言者**

後でサインください！

**967：伝言者**

私にも！

**968：伝言者**

ここでの約束は無理！

**969：伝言者**

そんなあ

**970：伝言者**

と言うか、そろそろ行かないと本当にまずい

**971：伝言者**

あ、ほんとだ、あと 30 秒

**972：伝言者**

今日は自分はお休みさ

**973：伝言者**

いいなあ

**974：伝言者**

というか、急げよー

**975：伝言者**

残ってるのもう今日の仕事がない人だけかな

**996：伝言者**

魔王城の遊戯室に……

**997：伝言者**

魔王さんなにしているんですか

**998：伝言者**

退屈だから作った。後悔はしてないぞ？

**999：伝言者**

魔王本人来た!?

**1000：伝言者**

そして時間切れ

**1001：伝言者**

これ以上書き込めません

**986：伝言者**

だから終わっていいんだよ

**987：伝言者**

1週間後に話すネタを集めよう

**988：伝言者**

うん

**989：伝言者**

そうしようか、でもここに書けるチャンスを誰が取るかもめそう

**990：伝言者**

じゃんけんかな

**991：伝言者**

ポーカーで

**992：伝言者**

こちらはチェスで決める

**993：伝言者**

大富豪

**994：伝言者**

ルーレット

**995：伝言者**

ルーレットあるの!?



「アレが四が武か……」

関所を無事通過し、しばらく歩くと街が目に入ってきた。

ちなみに、雨龍さんの正体は前もって関所に伝わっていたらしく、お役人が総員で頭を下げる騒ぎになるところだった。龍の国にあつて龍という存在は王並みのお偉いさんになるようだ。

「どれも同じくらいの大きさだったこれまでの街と違ってな、四が武からは大幅に広くなつておる。そのぶん、人も仕事も多い。お主のように色々と物事をこなせる人間なら、むやみやたらと戦闘をせずとも、次の街への通行を奉行所に認められるようになるのも十分に可能じゃ」

雨龍さんがそう教えてくれる。

「なるほど……先に来た人は、とにかくモンスターを倒しまくつて奉行所に認められたと聞いていました」

掲示板などで知った情報をぶつけてみた。

「それはそれで、治安維持行為として認められておるのじゃ。奴らは数が増えると強い個体を頭にかしらして街に攻め入ることがあるから、先手を打つて問題を潰したことになるわけよ。特に強い奴

を倒せば、それだけ安全にもなるじゃろう」

なるほどね、だから大物のモンスターを倒した人達は、あっさりと関所を通過することができたわけか……

「びゅびゅ」

そのとき、頭に乗せている鳥の妖精ピカーシャの鳴き声が聞こえ、反射的に警戒態勢に入る。どうやら、イノシシタイプのモンスターが一匹、こっちに向かってくるようだ。ここには雨龍さんがいるが、今は龍の力を完全に封印しているから、その存在に気がついていないのだろう。

「ピカーシャ、ありがとうな。さつさと始末して街に入るか」

【チェーン・ウィップ】を取り出し、待ち構える。それはなんとなく鞭と蹴りで戦いたい気分だったからで、深い意味はない。

突進してくるイノシシに、鞭で《拘束》をかけて動きを封じる。そして《上級鞭術》のアーツである《引き寄せ》を発動。《引き寄せ》はコンボ専用のアーツで、《拘束》した相手を瞬時に自分の目の前まで引つ張れるという効果を持つ。間合いをある程度空けて戦う槍などを相手にするときの有効だ。

引き寄せたイノシシに対して、すかさず蹴り系スキルのアーツ、《ハイパワフルシュート》を発動し、空中に蹴り上げる。

「ピギツ!？」

後はもちろん《大跳躍》で高くジャンプし、《フライ》で稼いだ滞空時間を生かして空中コンボに持ち込む。数回ほど牙を模した刃を付けてある【ファンング・レググブレード】による蹴りをイノシシにぶち込み、《エコーラッシュ》を仕掛けてその威力を反響させ、フィニッシュ。《拘束》対象が消滅した【チェーン・ウィップ】を回収しつつ、くるりと回って着地した。エリアル攻撃にはやはりロマンがある。

「ほうほう、そんな戦い方もできるのかえ」

ニンマリとこちらを見ってくる雨龍さん。

「たまにはこういう動きをしておかないと、体が鈍るので」

適当な理由を答えておいて、再び街に向かって歩き出す。こうして、ようやく四が武に到着した。

四が武に入ると、確かに今までの街よりも道が広くなっており、たくさんの人が行きかっている。道の左右にはお店が多く並び、食べ物や薬の店、宿屋などがいくつもあった。

「まるでお祭りみたいだな」

これが自分の感想であった。

「これぐらいの大きさは、この先の街では普通じゃやて。早めに慣れることじゃな」

雨龍さんがそんなアドバイスをくれる。まあ、しばらく街を歩けば自然と慣れてくるだろう。人間なんてそんなものだ。

「とりあえず今日から泊まる宿屋を探すか」

それなら、道行く人に聞くよりこの辺の商売人に聞くのがいい。

そう決めて、一番近い蕎麦屋に入る。ここなら食事のついでに宿も探せるだろう。

「宿屋を探すのではないのかえ？」

蕎麦屋に入る自分を見て雨龍さんが不思議そうに声をかけてくるが、とりあえず入ろうと手招きをした。

「はい、らっしやい！」

威勢のいい声で出迎えてくれたのはオヤジさんだ。

「らっしやい、どうぞー！」

店員と思われる若い男性が、自分達がついた机の上にお品書きを置いていく。ふむ、お勧めになっっている天ぷら蕎麦にしよう。

「雨さんは決まった？」

街中で気軽に雨龍さんの名は出せないで、関所をくぐった後、雨さんと呼ぶように話し合っておいたのである。

「お主は何にするつもりじゃ？」

どうやら決まっていなかったらしい。自分はお勧めメニューにすると伝えると、雨龍さんはお品書きを閉じながら「ならわらわも同じものにするかの」と言ってきた。

「ではオヤジさん、お勧めを三人前、お願いします！」

「三人前？」と首をひねるオヤジさん。そこで自分はピカーシャを手の上に乗せ、この子の分ですと説明して納得してもらおう。「そんな小さな体に入るのか？」との当然の疑問には、「自分より食べます」と答えておく。ピカーシャが自分の手をつんつんついで、そんなことはないと言議してくが、事実だろうが……

しばらくのんびり待った後、「お待たせしました、天ぷら蕎麦三人前です！」と店員さんがお盆を持ってきた。

そして出された蕎麦を食べ終えて、お勘定を済ませた自分は、店から出る前にオヤジさんに声をかけた。

「どうしやした？」

オヤジさんが来てくれたところで、三が武の宿で預かった判子はんこを見せる。

「この判子と関わりがある宿をご存じないでしょうか？」

判子を見たオヤジさんは、アゴをさすった後に呟く。

「コイツは……間違いねえな、あそこの宿だろう……」

どうやら思い当たる節があるようだ。

「この店を出て目の前の道を右に行つて、後はとにかくまっすぐ進むと、結構でかい建物が見えてきやす。その建物に入つて、そこの番頭さんにこの判子を見せりやええと思えますぜ」

街が大きい分、旅人だつて多く集まるだろうから、宿屋も相当大きいんだろうな。

オヤジさんに頭を下げてお礼を言い、店を出る。

「ありがとうございやした！」

出て行く自分達の後ろから、オヤジさんの声が聞こえた。代金は一人前七八〇グローだった。ちなみに雨籠さんは自分の食べた分は自分でちゃんと出している。

「宿屋の場所も分かったことだし、さっさと落ち着きますか」

「そうするかの、宿で落ち着いたら、後のことを考えようかの」

雨籠さんの質問に頷きつつ、道を歩く。人通りは多いが、歩くのに苦勞するほどではない。さすがに最大サイズのピカーシャが歩いてたら大迷惑になるけど。

蕎麦屋のオヤジさんが言った通り、しばらく行くとかなり大きめの建物が見えてきた。

「うーむ、今まで見てきた中でも大きいな」

「びゅ」

「わらわもこうして入るのは初めてじゃ」

いよいよ四が武での拠点となる見込みの宿屋の前に到着したが、その大きさにちよつと引いてしまった。立派な門、奥行きのある庭。一体ドコのお城ですか？と問いたくなるスケールである。しかし、突っ立っついても仕方がないので入ろうとしたところ、門の奥から四名ほどの男性従業員が出てきて止められた。

「申し訳ありません、当方は特殊な宿でして……お引き取りを」

ああ、俗に言う「お偉いさん御用達」ってことなのか？ そう考えながら、懐に手を入れて例の判子を取り出す。

「この判子を番頭さんにお見せしてください。三が武の女将さんから渡された物でして、これを見ただければ分かっていただけだと思います」

そうすると、四人の内の一人が判子を手に取り、色々な方向から細かく確認し始める。

「——本物か？」

「わからん」

「一応確認をとるか？」

「こんな旅人がこの判子を預かるなんて可能性があるのか？ またこの前来たような者達と同じではないか？」

なんとも不穏な雰囲気ではそばそつと話し合う従業員さん達。小さい声で喋っているけど、ばつちり聞こえてしまっているんですがね……

「精巧に作った偽物の可能性が高いだろうな、性懲りもない」

「十分にありうるな、人族の器用な職人が作ったのかもしれぬ。またひつかかると高をくくっておるのか」

「番頭様のお手を煩わせても仕方ないのでは？ ここは我々で」

「うむ」

あれま、そういう反応になりますか……こつちが聞いていたのを知ってか知らずか、向き直って判子をこちらに軽く投げてくる従業員さん達。ゆっくり曲線を描いた判子を、自分は慌ててキャッチする。

「この宿に泊まりたいがために小細工を重ねたようだが、無駄な努力だったな。早々に立ち去れ！ これ以上手間をかけさせるなら、詐欺の罪で奉行所に訴え出るぞ！」

なぜこんなことを言われるのだろうか？ 偽物とか言っていたが、とにかくこんな物言いをされるのなら、ここに居るべきではない。雨籠さんに目配せして、素早く後ろを向いた。長居は無用だ。

「ふん、そんな詐欺を働く己の薄汚さを恥じる。そつちの女も、いい年をしておるくせに」  
そんな声が後ろから聞こえたような気がした。

気がした、と表現したのには理由がある。というのも、直前まで空は雲ひとつない晴天だったというのに、突如一筋の雷光が落ちてきてとてつもない音が轟き渡ったせいで、実際には何も聞こえなかったからだ。衝撃で地面は激しく揺れ、自分は立っついたられずついしやがみこんでしまう。一体、何が起こった!?

「——たわけは己らのほうよ。この者はそんな悪事は働かぬのにな」

非常に冷たい声色で、雨籠さんがボソツと呟いたのが聞こえた……直感が、「今は後ろを振り返ってはいけない」と教えてくれる。それに従い、地面の揺れが収まってから立ち上がり、ゆっく



りと前だけを見てその場を立ち去った。

体全体に冷や汗と脂汗がじわりと滲み出てくるほどの恐怖を感じる。

後ろが騒がしいのが非常に気になるが、直感が「まだ振り向くな、死ぬぞ」と教えてくれているので、振り向けない。しばらくはそのまま前だけを向いて歩き続け、死の気配が収まったところまでへなへなど地面に座り込んだ。

ヴァーチャルリアリティの世界とはいえ、ここまで真に迫る恐怖を味わうとは。ホラー映画なんて目じゃない。

「どうしたのかえ？」

いつもの声色に戻った雨龍さんが声をかけてくるが……

「さ、さつき突然降って来た雷で腰が抜けた……」

こう取り繕うのが精一杯だった。

「なんじゃ、情けないのう。お主は男ではないか、そんなことでは強くなれぬぞ？ うん？」

雨龍さんはくすくすと笑うが、自分は本気で怖かった。恐らく口を滑らした従業員は……死んでこそいけないかもしれないが、再起不能だろう。現実世界でも、落雷を受ければ人なんて簡単に死ぬ。地震、雷、火事、かあちゃん、と恐ろしいものの内の四つとして挙げられているくらいだ。

あの従業員のせいで、とんだ宿探しになってしまった。

「と、とりあえず他の宿屋を探そうか……大きい宿屋はダメだ、あんな奴ばかりの可能性が

ある」

雨龍さんも「同感じゃな。あんな、見かけは豪華でも心のすさんだ宿はごめんじゃ」と言ってくれたので、小さめで良さそうな宿屋を探す。

二〇分ほど探すと、ほどほどに良さそうな宿屋が見つかった。

「いらっしやいませ、二名様でしょうか？」

宿に入ると、女将さんと思しき人が確認をしてくる。まあピカーシャが数に入らないのはしょうがないだろうな。「二名です」と告げて空気があるかを聞くと、幸い「ある」との答えだった。

「すまぬが女将、風呂はあるのかえ？」

風呂を気にするとは、やはり雨龍さんも女性ということか。女将さんは笑顔で「さほど大きくはありませんが……」と前置きした上で、風呂があると雨龍さんに告げた。

「雨さん、ここでいいと思うが、どうだろうか？」

「そうじゃな、問題なからう。女将、世話になるぞ」

何とか、四が武で拠点となる宿を確保できた。案内された個室に入り、そこでようやくひと息つく。

「やれやれ、えらい目にあつたな」

それはあの従業員達も同じだろうが……同情する気などない。

「ふん、身から出た錆じゃ」

「びゅびゅ！」

雨龍さんの意見に、ピカーシャも同意しているようだ。正直なところ、客商売をする者の態度ではなかったからな……今日の話が周りに広がったら、あの宿屋は潰れるんじゃないか？

「まあ、雨龍さんやピカーシャの言う通りか。幸いいい宿が見つかってよかったけど」

ただ、問題はこれだよな……と判子を取り出してみる。

「捨ててもよいのではないか？」

雨龍さんはそう言うってくるが、あの三が武の女将がそんな変な物を渡すかな？ 少なくとも、自分に害を与えて得をするとは思えない。そんなことを考えていると、ピカーシャが一枚の紙をくわえてきた。

「びゅ」

そして自分の前にその紙を置いて、ツンツンとつつく。

「判子を押してみろっていうのか？」

自分の言葉に、ピカーシャはコクコクと小さく頷く。

「そうじゃな、朱肉もここに備え付けてあるし、押してみるのもよいかもしれんぞ」

雨龍さんに差し出された朱肉に判子を当て、紙に押してみる。浮かび上がった文字は……

「天龍？」

よく見ると、「天」の字の中央に非常に小さな昇り龍が彫り込まれている。これはだいたい注意し

ないと間違いなく見落としてしまう。

「こちらを騙すにしても、これは手が込みすぎてないか？ 雨龍さんはどう見る？」

「ふむ……少なくとも三が武の女将には、わしらははめるつもりはないようじゃのう」

結局、余計訳が分からなくなってしまう。まあ龍の国を出る前にもう一度三が武に立ち寄って、判子を返却すればよいという意見に纏まった。

その後は風呂を満喫し、ログアウト。四が武でもトラブルが多発しそうな予感でいっぱいだ。

ちなみに、風呂は当然男女別であった。

翌日。ログインすると、布団から起き上がってあくびをする。

「おう、お目覚めかえ」

視線を横に移すと、雨龍さんがのんびりお茶を飲んでた。ピカーシャは自分が入っていた布団の上でうつらうつらと舟をこいでいる。

「さて、今日も頑張りますか……の前に」

会社のお昼休みを利用して、昨日のことについて調べようと掲示板などを大雑把に眺めてみた。

「偽物」「判子」で検索してみると、残念ながらヒットした内容があった。

「昨日のごたごたが起きた原因について、分かったことがある。どうも、数日前にあの宿屋に泊まってみたいという好奇心を抑えられず、判子の偽物を作って入った者がいるらしいんだ」

何のことはない、あそこまで悪意を持たれた原因は、プレイヤー側にあったというわけだ……

「わらわも少々調べてみたぞ。お主の言った通りで間違いないようじゃな。そのときの門番従業員は、偽物を見破れなかったためにそれなりの罰を受けた様子じゃ。だから新しい門番達は神経を尖らせていて、疑わしきは全て通さぬという考えに凝り固まっていたようじゃ。それを考慮しても、浅慮であったことは否めぬがの」

原因はプレイヤー側にあり、という部分は変わらないのだが……

「ま、もう過ぎてしまったことだから仕方がない。それにある意味、こうなってよかったのかもしれない。雨龍さんの正体がああいう大きい宿屋の従業員にばれたら、それこそ異様なもてなしを受けることになるだろうし、それではかえって疲れないか？」

「その意見は否定できないのう」

お互いの顔を見合わせ、頷く。

「だからこの先では、このようなやや地味めでお風呂がある宿屋に泊まろうと思うのだが、どうだろうか」

「そうじゃな、わらわも目立ちたいわけなし、それでよいぞ」

「びゅびゅ」

起きてきたピカーシャも同意しているようだ。

「とりあえず、今後の方針はそうするということで」

「では朝餉じや」

「びゅびゅ」

部屋を出て、宿屋の食堂に向かう。出された料理はそこそこおいしく、不満は特になかった。しつかりと完食し、「馳走様でした」と言つて手を合わせると、宿屋の女将さんが「はい、お粗末様でした」とこちらを見ながら応えてくれた。なんとも丁寧な人である。

それから女将さんに出かける旨を告げて、鍵を一旦預ける。

「とりあえずは、街を見て回るか、それとも外に出て軽く肩慣らしをするかってところなのだが」

「びゅ」

「外に出ようではないか。街のほうは、必要ならわらわが案内すれば済む」

二人に聞くとこんな返事だったので、外に出ることに。雨龍さんがこの街を知っているというのなら、そちらのほうがいいからな。

矢の準備もして、いざ外へ。モンスター関連の情報はあえて集めていないので、どんな奴がどこにいるかは分からない。のんびりムードはおしまいにして、ちゃんと警戒を始める。

「一応、わらわに襲い掛かってきた相手はこちらで迎撃する。ワザとこちらにぶつけるような真似はせぬと信じておるぞ？」

ああ、完全に自分に任せつきりというわけではないのか。手伝いはしてくれないが、こちらの負担を故意に増やすこともしない。もしかして、これって「双龍の試練」の延長戦……？ いや、さ

すがに深読みしすぎか？ だが、現にゴロウは砂龍さりゅうさんに連れて行かれているし……

「まあいいか……」

いちいち考え込むのも面倒だ。今はぼつさり切り捨てることにする。「龍の儀式」を目指している限り、雨龍さんが自分に変なちよつかいをかけてくることはないだろう……年齢を聞いたりさえしなければ、だが。気を取り直して、〈遠視〉を発動してモンスターの姿を探す。

（この付近は街の近くということもあってか、モンスターはぼつぼつという程度だな……）

イノシシや、たまにゴ布林がいるぐらいだった。街に入る前にイノシシとは戦っていたので、今回はゴ布林にしよう。

まずは久々に使う《ホークショット》で、ゴ布林を遠くから狙い撃つ。一射目でこちらに気がついて駆け出てきたが、次々と自分が射る矢によって、接近戦になる前に崩れ去った。

（単体の強さは三が武と大して変わりはないか。だが今まで出会ったことがないタイプのゴ布林がいてもおかしくはないし、慢心はいけない）

ゆっくりと進みつつ、〈遠視〉で獲物を探す。そして見つけ次第、即座に射殺していく。それを一時間ほど続けただろうか。

（とりあえず街の近辺ではこんなものか……明日からはもう少し奥に踏み込んでみるべきだな）

敵を見つけては遠距離から一方的に射殺したため、今日はこちらの被弾はゼロ。こういうパターンにはまると、飛び道具というのは非常に強力である。





【スキル一覧】

- 〈風震狩弓〉 Lv 26 (↑1 UP) 〈剛蹴〉 Lv 2 (↑1 UP) 〈遠視〉 Lv 68 (↑2 UP)
- 〈製作の指先〉 Lv 86 〈小盾〉 Lv 16 〈隠蔽〉 Lv 46 〈身体能力強化〉 Lv 73 (↑1 UP)
- 〈義賊〉 Lv 47 〈上級鞭術〉 Lv 15 〈妖精言語〉 Lv 99 (強制習得・控えスキルへの移動不可能)
- 控えスキル
- 〈木工〉 Lv 42 〈上級鍛冶〉 Lv 40 〈上級薬剤〉 Lv 15 〈上級料理〉 Lv 36
- EXP 25
- 称号：妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者
- 妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人難の相
- プレイヤーからの二つ名：妖精王候補 (妬) 戦場の料理人
- 同行者：青のピカーシャ (アクア) 〈飛行可能〉 〈騎乗可能〉 〈戦闘可能〉 〈魔法所持〉
- 〈風呂好き〉 〈???の可能性〉
- 同行者：雨龍 〈基本戦闘参加不能〉 〈基本戦闘支援不能〉 〈基本戦闘妨害不能〉
- 〈人型変化可能〉 〈風呂好き〉 〈特定質問による凶暴化〉

とはいえ、二が武にもいたハンタータイプのゴブリンや魔法使いタイプのゴブリンと出会わなかったおかげであり、今日はたまたま幸運だったと考えておくほうがよいだろう。

「弓の腕は十分にあるようじゃな」

すっかり存在を忘れていた雨龍さんに声をかけられ、ビクツと体が反応してしまったのはご愛嬌——正直に白状すれば、素でびつくりしていたのだが。

「『双龍の試練』に比べれば十分に余裕がありましたから」

何とか動揺を隠して答える。

「確かにのう。さて、今日はそろそろ引き揚げてよいのではないか？」

言われてみれば、かなり集中していたので、軽く疲れているかもしれない。ここは雨龍さんの言う通り引き揚げておくべきだろう。無茶をしたところでいいことは何もない。

「そうですね、今日はここまでにしましょう」

頭に乗せたピカーシャにも確認した後、街へと帰還する。帰還途中でモンスターを数匹見かけたが、十分に距離があったため戦いは避けた。一旦帰るといふ思考に入ったら、その後は必要でない戦いに臨んでもいい結果は出ないと考えているからだ。

途中で厄介なモンスターに襲われることもなく、無事宿屋に到着した。本番は明日からだな。